

さ か い か ん ご う と し い せ き

堺環濠都市遺跡

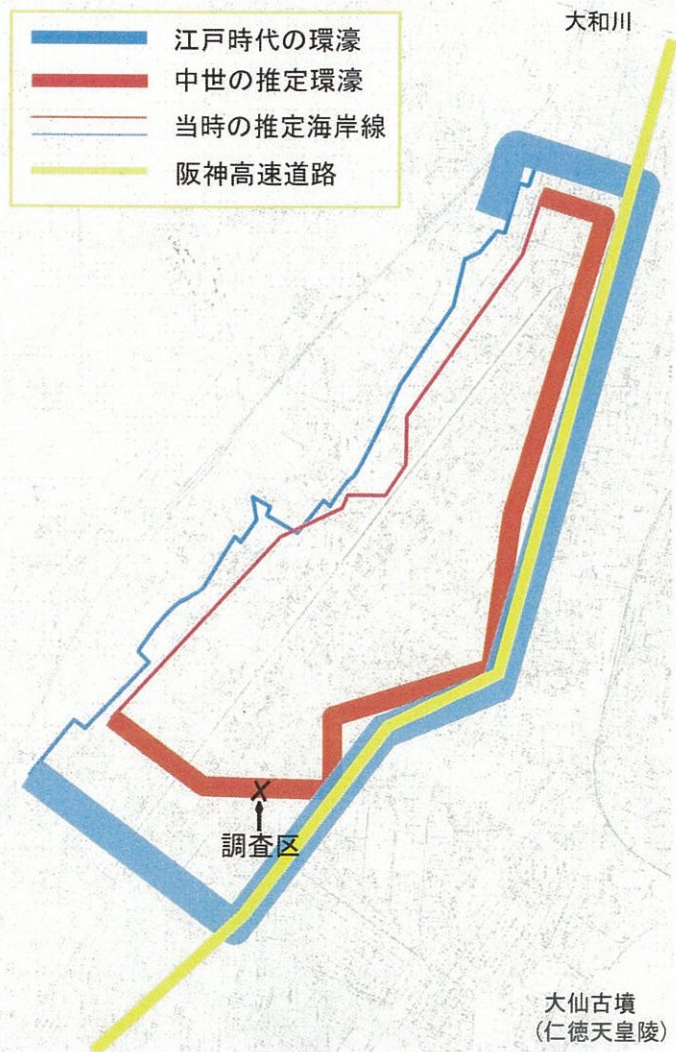
SKT960

2007. 5. 26

堺環濠都市は、戦国時代～江戸時代にかけて栄えた貿易都市です。遣明船の発着港になったのを契機に、中国・琉球・東南アジアと広域貿易を展開し、“黄金の日々”と謳われたように繁栄を極めます。そして、都市を濠（環濠）で囲い、商業の自由と自治を守り続けました。慶長20年(1615年)大坂夏の陣で、豊臣方の焼き討ちによって中世の堺環濠都市は終焉を迎えますが、その後、江戸幕府によって再建されます。その際、都市は一回り大きくなり、環濠も掘り直されます。

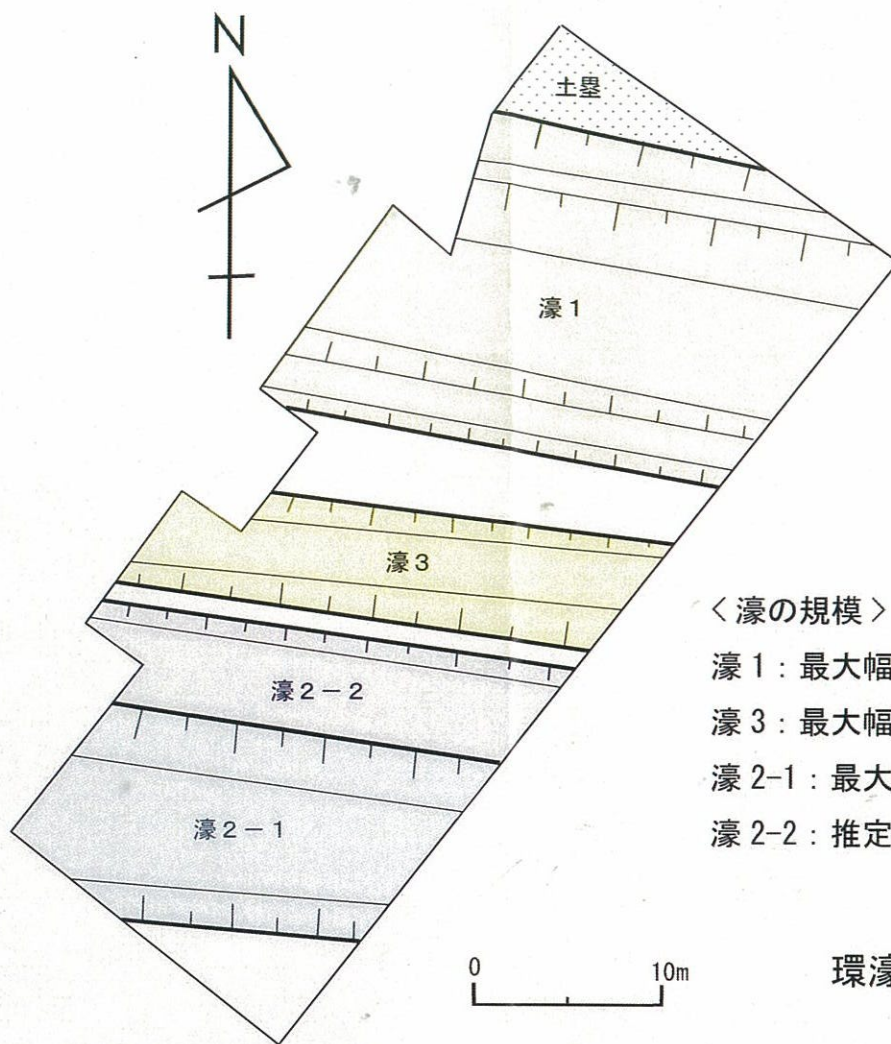
今回の調査では、環濠を4条発見しました。これまで、平行する2条の環濠の存在は判明していますが、4条もの環濠が存在するという新知見は、自治都市堺の成立と発展を考える上で貴重な資料といえます。また、環濠の規模においても、これまで確認されている濠の中で最大級のもので、これらの環濠は、江戸幕府が新たに掘り直した環濠よりも古いものです。現時点で判明していることは、北側に位置する濠1が一番古く、15世紀後半頃に掘削された可能性があり、掘りあげた土で濠の北側に土塁を築いていました。この濠は、天正14年(1586年)、権力を掌握した豊臣秀吉によって埋め戻し令が出された際に、北側の土塁を崩しながら埋められました。その後、短期間の間に埋め戻しと掘削を繰り返し、町を拡張しながら、濠の位置を南へと移動させていったようです。最終的に、濠2-1が掘削され、大坂夏の陣の時には環濠として機能していたと考えられます。その後、この濠の西側は江戸時代においても埋め戻されず、ゴミ捨て場として利用されていました。

各濠からは、多種多様な遺物が出土しています。陶磁器には瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・唐津焼など国内で生産されたものや、中国・朝鮮半島からの輸入陶磁器もみられます。また、箸・下駄・漆器椀などの木製品や、動物の骨などがあります。



財団法人 大阪府文化財センター

大仙古墳
(仁徳天皇陵)



〈濠の規模〉

濠1：最大幅 17m 深さ 4.5m

濠3：最大幅 6m 深さ 1.8m

濠2-1：最大幅 11m 深さ 2.5m

濠2-2：推定幅 6～7m 深さ 2.5m

環濠 平面図



濠1 断面（東から）